

発達障害の子どもが園で生き生きを過ごせるために

講師

竹田 契一 大阪医科大学LDセンター顧問

1. 発達障害の原因は

(1) 中枢神経系の障害

今回のテーマは「発達障害の子どもが園で生き生きと過ごせるために」です。けれども実は幼児期において発達障害の子どもというのはなかなか分からないものです。

よく母親から「私のせいでしょうか」と尋ねられることがあります。確かに1940年から60年代にかけて、アメリカで「冷蔵庫マザー」という言葉が流行り、母親が上手に子育てをしないことが発達障害の原因であると言われていました。しかし現在では母親の「育て方」「躾」「その子の生まれ育った環境」が発達障害の原因にはならないことが分かっています。発達障害は全て中枢神経系の障害が背景にあり、広い意味で脳の障害です。

(2) 例外事例

けれども例外があります。

「揺さぶられっこ症候群」は、まだ首の座っていないような赤ちゃんを大きく激しく揺さぶることで脳の障害に繋がるというものです。あまりにも子どもが泣きやまず、親がカーッとなって激しく揺さぶってしまうような虐待ケースもあります。

そして、近年、0歳の時の虐待が脳に大きな影響を与えることが分かってきました。子どもの脳は生後までもない時期、シナプスの形成が非常に速く、成熟動物よりもずっと密度が高くなります。そこでメインルートだけを残して刈り取ることで、必要な結合が強められ機能的な神経経路がつくられていきます。その際に、親から激しく叱られる、あるいは夫婦喧嘩の真ん中において非常

に怖がるなど、言葉の暴力を受けることにより聴覚系に刺激を受けてしまい、聴覚野のシナプスの刈り込みがうまくいかなくなる。そのため、聴覚理解が弱くなるということが分かったのです。

(3) 脳の配線が違う子ども

聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚などの五感によって周りの状況の情報を整理して経験していく過程、特に視空間の知覚能力、視覚と運動との協応性、聴知覚、視知覚ということにおいて、脳の配線そのものが、定型発達の子どものとは何かしら少し違うのではないかとされています。

2. 育てにくさ

(1) 子どもの育てにくさ感

きょうだいと比較することによって初めてそこに「育てにくさ」が浮き彫りになる子どもがいます。

育てにくさ感としては、一人遊びが大好きで母親の後追いをしない、とにかく泣き出したら止まらない、いつも不機嫌あるいは突然機嫌が悪くなる、常に落ち着きがなくじっとしていない、言葉はたくさんあるのだがどうも小さいときから一言多く周りを傷つける、お喋りで周りを気にせず人が話をしてもすぐに割り込んだりする、知らない人にでも親しく喋ってしまい警戒心が乏しい、偏食が非常に強い、こだわりが強い、感覚の問題がある、などです。

ただし、偏食についてはそれだけで発達系の問題とはいえません。けれど、他のものはいくつか合併して子どもに起きたときには要注意です。

こだわりの強さが出たときには自閉症を疑います。

（２）孤立しやすい母親

親にしてみれば「どうしてそうなったのだろう」と様々な疑念や混乱が生じます。特に、初めて子どもを育てる母親にとっては、どう育てていったらいいのか分からず、誰にも教えてもらえないことから、どんどんと不安になります。中には、園で暴言を吐いたり、他の子どもを蹴ったり叩いたり引っ掻いたり唾を吐きかけたりする子どももいます。友達に怪我をさせたとして、毎週のように謝りに行かねばならないことも出てきます。そうすると本当はそうでなくても、周りの母親の目が冷たいように思えてしまいます。病院で相談をしても、ピンポイントで自分の問題に対応できるプログラムがありません。父親の前ではいい子だったりするので、夫に話をしても「お前の子育てが良くないからそうなっているのだ」と言われる。いくら真剣に話しても「俺は忙しいんだ。子育てはお前に任せているんだから、お前が全部やってくれなければ困る」と他人事のように言われてしまう。そうすると、母親自身がどんどんと孤立して行ってしまいます。子育てそのものはうまく行って当たり前で、何かあると全て母親に責任があるかのように思われてしまうことが、今の日本にはまだまだ残っています。こういうことから母親自身がどんどんと落ち込んで行ってしまいます。ここが非常に大きな問題です。

先生方が園で保護者に対応するとき、その子どもが様々な発達課題を抱えているときには、子どもだけではなく、その背景にいる母親が非常に辛い思いをし、不安な気持ちでいることに思いを巡らせてください。母親にかかる先生の一言は大変重要です。そのことを十分に理解してください。

（３）愛着障害

一見、発達障害のように見える子どもの中には、乳幼児期の長期に渡るネグレクトなどの虐待による愛着障害が原因の子どもがいます。そのように育った子どもは、園の中で、衝動的で破壊的な行動をとったり、叱られると極端に落ち込んだり、非常に自尊感情が弱かったり、いつも自分が周り

からどう思われているのかが気になって仕方がなかったりする姿を見せることがあります。また、うまくコミュニケーションが取れない、人との関係が苦手であるなどから、自閉スペクトラム症ではないかと思われてしまうこともあり、そうになると、小児科や児童精神科の先生の診断が必要になります。

3. 感覚運動機能の大切さ

（１）感覚運動機能

感覚の問題は、幼児期におけるサインになります。

感覚には「聴覚」「味覚」「触覚」「視知覚」「嗅覚」「固有感覚」の6つがあります。

聴覚は「聞く力」と「前庭感覚」を含んでいます。聞く力に問題を抱えていると、おおげさに思われるくらいに耳をふさいでしゃがみ込む子どもがいます。敏感過ぎて、他の子どもが聞こえていない音が聞こえていたり、ちょっとした音でビクッとしたりする子どもがいます。前庭感覚は、耳の中にある三半規管がもっている「クルクル回る」「ジャンプをする」「加速度をつける」「バランスをとる」などを確保する機能です。園でもよくクルクル回っている子どもやつま先でジャンプを繰り返す子どもを見ます。このような動作は、その前にあった不安な気持ちを打ち消すという意味で行うことが多いのです。なぜそのような動作をするのかをしっかりと理解しておく必要があります。全て発達障害というわけではありませんが、可能性を含んだものです。

固有感覚は、シャツの後ろのタグがチクチクするからと切って欲しがる、冬場着ていた長袖のパーカーを夏になっても脱がない、ベトベトしたものを触りたがらない、頭を洗いたがらない、髪の毛や爪を切るのを異常に痛がるなど、他の人から見るとおおげさに見える様々な状態は感覚過敏からくることがあります。反対に、痛み非常に鈍感である、血が出ていても気付かない、足に大怪我をしているのに平気で走っているなど、鈍感さをもつ場合もあります。

このような感覚系の問題を複数重なってもっている場合は、発達障害を疑ってみます。これらは小児科や児童精神科の診断を受けるときに伝える必要のある重要な項目です。

（２）感覚過敏（HSC）

近年、感覚過敏をたくさんもっているところから、自閉スペクトラム症と誤診されてしまう子どもが出てきています。感覚過敏の特徴は、共感性が高く感情豊かで、人の痛みを自分のことのように感じる、音や光が苦手、寒さ暑さにも敏感、非常に疲れやすい、物事を深く考える力をもっている、刺激を受けやすい、些細な変化にも気付くなどです。共感性が高いところや些細な変化にも気付くところは自閉スペクトラム症とは違うところですが、刺激を受けやすいところは同じです。ただ、単なる感覚過敏は病気ではなく、診断名がつくようなものではありませんが、最近の文明病といえますか、この20年ほどの間に非常に増えてしまっているように感じています。

4. 困った子ではなく困っている子

園でよく先生や保護者から「この子大変な子で困っているんです」と聞くことがあります。ですが、本当に困っているのは子どもの方です。困った子ではなく困っている子であるという気持ちを先生も保護者もぜひもってください。「なんで僕は叱られるんだろう」「分からないからやってしまった」と子ども自身が困っています。けれど他の子どもと違う行動をとる、他の子どもができるのにこの子だけができないので無造作に叱ってしまうということはありませんか。しかも本人はきつく叱られたと思ってしまう、母親からも叱られる、先生からも叱られるとなると、ますます混乱してしまいます。ADHDタイプの子どものは叱られたということが分かるのですが、自閉スペクトラム症の子どもは叱られている原因が分からないケースが多いです。

5. 幼児期に分かったこと

（１）幼児期にみられる特性理解

幼児期におけるサインがいくつかあります。ハサミや箸が上手に使えないような不器用さが目立つ、落ち着きがなくすぐに部屋中を走り回る、人の話を聞くという聴覚の部分が弱い、やりとりが苦手、2つのことを同時にすることが苦手、感覚の過敏さや鈍感さが年長児になっても続いている、いろいろなものにこだわりをもつ、記憶が非常に良いなどです。

絵や動作などの視覚情報で見せたときには分かるのだが、言葉ではなかなか通じない。このような子どもを視覚優位と言いますが、聞く力が弱いことから上記のような姿が見られることがあります。そうすると将来読み書きの問題が出てくるかもしれません。

「やりとり」というのは、こちらが投げたボールを受け止めて、投げ返したボールをこちらが受け止めるというキャッチボールです。こちらから投げても相手がうまく受け止められない、相手が投げるボールがとても少ないために何を考えているのかなかなか分からない。このように一方的なコミュニケーションが起こってくるときには要注意です。

（２）言葉かけ

「あの子は〇〇が分からない」「△△ができない」と言われる先生のクラスを見ていると、先生が早口だったり文章が長過ぎたりすることがあります。ゆっくりと口がはっきりと見えるようにやさしく分かりやすく話をしていないために、子どもが理解できていないケースがたくさんあります。話をするときに必要なことは「今この子は何を考えているのかな」「どういう気持ちでこれをしているのかな」と常に子どもの気持ちを察することです。子どもが喋っていることよりも、伝えたいと思っている内容をこちらがしっかりと理解していくことがとても大切だと思います。

（３）褒める子育て、正しい理解

子どもが小さいときはどうしても「早くしなさい」「いつまでしているの」「何回言ったら分かるの」「〇〇はダメ」と命令形や否定的な言葉を使いがちです。発達段階の最初の頃は、叱るよりも上手に褒めて育てることが大切です。特に乳幼児期には、できたときにしっかり褒めることが肝心です。そしてその褒め方が後の子育てに大きく影響します。今、この子は何ができて、まだ何ができていないのかを正しく理解し、本人ができることがうまくできなかった場合は丁寧に話をし、できないことに関してできていないことを大きな声で叱るのは大きな問題になります。

障害のないきょうだいに寂しい思いをさせない、祖父母にも正しい理解と対応を求めるなども大切なことです。

そして最初の段階では、「障害」ではなく「特性」であるという考え方をしっかりと持って欲しいと思います。そういうものをもって生まれた子どもであり、その全体を本人として認めていく考え方がとても大切です。あら捜しから始めると、どうしても叱ることが多くなってしまいます。今現在、何ができて何ができていないのか、どういう特性をもっている子どもなのかという子どもへの正しい理解を早いうちにもつことが、実は上手に褒めることに繋がります。

（４）コミュニケーションのコツ

「何々してはダメ」という否定的な言葉ではなく「〇〇しようね」と肯定的な言葉で言い直しましょう。特に自閉的要素をもっている子どもに「間違っているから直しなさい」「そうじゃないでしょ」と否定的に言うとは頑固に無視をすることがあります。そうすると「何度言ったら分かるの！そこ直しなさい」と言ってしまうことになってしまいます。そうではなく「こういうふうにした方が良くなるよね」と肯定的に話をするようにして欲しいと思います。特に自閉とADHDの要素をもっている子どもは否定語がとても苦手です。

（５）褒め方

結果ではなくプロセスを褒めましょう。学校に入ったときに大きく影響してきます。例えばテストで100点をとってきたら褒めたいくなります。そのときに「100点すごいね」と褒めてしまうと、次から100点未満は全てダメだと思ってしまふことがあります。点数とは相対的なもので、問題が難しければ1番良くて80点ということもあります。そのようなときでも100点でなければダメだと80点の答案を隠してしまうようなことも起こります。特に自閉スペクトラム症の子どもにとっては要注意です。結果ではなく、「毎日一生懸命に頑張っているんだよね」とプロセスを褒めるようにしてください。

その子がそれまでしなかったことを突然してくると「雪が降りそうね」など言ってしまいそうになりますが、皮肉は通じません。言わないでください。

「お兄ちゃんもつと言うこときいたよね」「Aくんはちゃんとできたよね」というように他人と比較しない。これも大切です。

これらがうまくいかないと、自己有用感や自尊心を傷つけることになってしまいます。「どうせ僕はダメなんだ」「いくらやっても褒めてもらえない」とあらゆることに自信を無くしてしまう子どもになってしまいます。乳幼児期には褒め方を考えて上手に褒めて欲しいと思います。

（６）指示を一度にたくさん言わない

2つ以上のことを同時に言わないことが大切です。

例えば母親が「4時に帰ってくるからね。雨が降りそうだから洗濯物を入れておいてね、それから犬のコロちゃんにはちゃんと餌をやるのよ。あなたのおやつは冷蔵庫に入っているからチンして食べてね。わかった？」と言って出かけていったとします。帰ってきたときには、自分のおやつだけ食べていて後は何もしていません。母親にしてみれば「さっき言ったでしょ、何回言ったら分かるの！」ということになります。

発達障害の子どもは年齢に関係なく2つのことを同時にするのが苦手です。子どもが生き生きとしっかりとその場を過ごすためには、子どもに合わせる必要があります。クラスにそのような子どもがいるときには、指示を1つにしてください。2つ以上のことを同時に言うとどれか忘れてしまいます。どうしても2つ以上の指示が必要な場合は、項目ごとを絵にして「1番はこれをします」というように1つずつ順番に示していくことが非常に大切です。

6. ADHD

(1) ADHDとは

ADHDとは不注意、多動性、衝動性をもっている人のことで、昔は注意欠陥多動性障害と言っていました。最近では注意欠如多動症と言います。だいたい3歳くらいから見られるようになり、園と自宅というように最低2カ所で同じような状態が6カ月以上継続して見られるときに、診断名が出ることがあります。

「何回言ったら分かるの」「早くしなさい」と言わずに子育てしている人はいないのではないのでしょうか。けれどその中にはADHDの子どもがいます。ADHDの一番大きな特徴は「すぐ忘れる」です。その場は覚えているのでやろうとします。けれども次の日には忘れてしまいます。そうすると周りの人は「何回言ったら分かるの」と言ってしまう。

競走するときには「位置について、用意、ドン」でスタートします。けれどもADHDの子どもは小学生でも「位置について、用意」の段階で走っています。最後まで聞けません。要するに待つことができず、我慢ができないのです。

BくんはCくんは何度も「ブタ」と言います。Cくんは泣いて帰り、それを知った母親が園にそのことを告げます。先生はBくんとCくんを呼びます。Bくんは「もう二度と言いません」と反省し、先生はCくんに「ちゃんと謝っているからBくんを許してあげてね」と言います。BくんはCくんに「ごめんなさい」と言いました。普通であ

ればこれで一件落着です。けれどもBくんは「すぐに忘れる」「待つことができず、我慢ができない」のを特徴としています。「もう二度と言いません」と言ったことはすぐに忘れてしまいます。「これを言ったらCくんが傷つくな」ということを普通は言わないものですが、我慢ができません。当然次の日の朝、Cくんが来たら「おい、ブタ」と言ってしまうのです。そうすると先生は「Bくん、あなたは昨日なんて約束したの？もう二度と言いませんと言ったじゃないの。Cくんにちゃんと謝ったでしょ」と言うことになってしまいます。

すぐに忘れる。待つことができず、ぐっと我慢することができず、思ったことをすぐに言う、やってしまう。この2つと落ち着きがない、これがADHDの特徴的な特性です。

(2) 乳児期のADHD

落ち着きのなさによる不眠や過度の眠気など睡眠の問題をもつ、ミルクの飲みが悪い、食事の好き嫌いが激しい、食事に影響があるくらい泣くなどの特徴が赤ちゃんの頃からある子どもがいます。親は育てにくいと思われていても「赤ちゃんってこういうものよね」とさほど気にならないのですが、こういった状態の子どもが幼児期に入ってきたときにADHDの要素をもちます。

(3) 幼児期のADHD

落ち着きがない、非常に好奇心があつておもちゃを触りまくる、そして乱暴で壊してしまう、親の注意を引こうとする、特に男の子は言うことをきかない、癇癪をおこす、トイレトレーニングがうまくいかなくて時間がかかるなど発達上段階を完了するのが困難、睡眠のパターンが不安定である、言葉の発達の遅れや運動機能の不器用さが出てくる。けれど、よく喋り、言葉もちゃんとあり、先生の話も聞いている。このような状態が4～6歳で出てきます。学校に入ったときに椅子に45分座るのは難しく、学力が上がらない。そこで初めてADHDだということが分かったりします。

（４）ADHDの長所

エネルギーがいっぱい、好奇心がいっぱい、運動神経が良い、独創的で個性的で友達が多い、ユーモアのセンスもあるのでクラスで人気者である、人の気持ちが分かるので周りの子どもを援助してあげるなどの長所があります。これらを活かして生きているADHDの大人は山ほどいます。

（５）変わった子、難しい子への対応

そのような子どもがクラスに入ったときには、どのような認知特性をもっているかを観察するのが大切です。1対1のときと集団のときと違いがないか見てみましょう。家庭では1対1、あるいは数人のきょうだいの中にいます。そのため、園のような集団の中での状態と家庭の中での状態が全く違うことがあります。家庭ではほとんど問題を起こしていないのに、先生から園で集団行動ができないと言われて、親がびっくりするということが起こります。そうすると「家ではちゃんとしています」と母親が子どもの特性を認めてくれないと園が頭を抱えることになります。家庭の中で母親が見ている限りはそんなに大きな問題を起こしてないからです。1対1であれば言うことを聞いてくれるのです。1対1であれば比較的落ち着いて、しかも母親が子どもに合わせて遊びますから、遊びも広がらず上手に遊んでいます。けれど園ではおもちゃも多く、自由保育のときにはみんなが好きなことをしています。そうすると嬉しくなって走り回り目立ってしまうわけです。それらのことも分かった上で先生方は対応しなければならぬと思います。

（６）ハイリスクへの対策

事前の注意は全く役に立ちません。例えば「信号のところでは立ち止まりましょう」ということも、聞いて分かるのですが、すぐに忘れてしまうため、飛び出してしまいます。飛び出すことについては、大人が手を繋ぐか危ないところに行かないということしか対策はありません。注意するのは周りの大人の役目であり、手を離れた方の責任

です。こういうものをハイリスクと言い、訓練でどうにかできるものではありません。そういう場面を避けるしかないと思ってください。「昨日注意したんですけど」「さっき子どもに言いました」は通用しません。ADHDの子どもに対して、言葉の注意はほとんど無意味です。自分ではそう思っても、すぐに忘れてしまうことを、ぜひ理解してください。

（７）やめさせたいふるまい

小学校低学年のやめさせたいふるまいを思い起してみます。他の子を叩く、押す、いじめる。学校や教室の器具を壊す。指名されないのに発言し、先生の話を遮る。許可なく決められた席からいなくなる。汚い言葉を使う。他の子をからかったり馬鹿にしたりする。これらの中に、ADHDの要素をもっている特性がいっぱい出てきます。

（８）褒めるとは

ここで「褒め方」が大切になります。よく子どもを褒めるときに「良かったよ」「上手にできたね」と言ってしまうがちです。けれども「Aくんが良い」というよりも「Dくんのやったその行動が良かったよ」と褒めるようにしましょう。「いつもだったらここで一言言ってしまうけれど、今日は黙っていたね。そのことを先生はとても嬉しく思うよ」「いつもだったらここで立ち上がって部屋中走り回るのに、今日ちゃんと座っておれたね、Dくんすごい」と言って褒めるのです。子どもの行動の面で子どもが上手にできたときに褒めることが大切です。

（９）クールダウンの部屋

パニックを起こしやすい子どもにクールダウンの部屋を設けておくとうい良いでしょう。なかなか場所の確保は難しいかもしれませんが、園長室や職員室になるかもしれませんが、普通の部屋であれば隅っこの方に大きめの段ボールで小部屋を作るとよいでしょう。ちょっと小さく暗いめがお勧めです。ちょっとイライラしたり気分を害して泣

きたくなったりしたときに気持ちが落ち着く場所としておくことも大切です。

(10) 時間感覚の欠如

「早くしなさい」ということとも関係してくるのですが、時間感覚が身に付きにくいところがあります。時間の観念がない子どもには「〇〇が終わったら次に△△をする」ということがなかなか理解できません。そうすると門限やスケジュール、期限など約束が守れません。そういうときには「タイムタイマー」を使うと良いでしょう。残っている時間が赤く表示され、時間の経過と共に赤の部分が減っていき、最後には赤い部分がなくなりゼロとなるように、時間が視覚的に分かりやすくなっているタイマーです。

(11) まずは寄り添い話を聞く

話を聞くときにはとにかく寄り添って聞きましょう。瞬間反応型ですぐ怒るタイプの人は少し注意が必要です。こちらから言いたいことがいっぱいあっても、とにかくまずは本人に全部話をさせます。話を聞いた後に「だからEちゃんはFくんを叩いたんだね。だけど先生はこうした方がいいと思うよ」と伝えましょう。

(12) 診断

乳幼児期は医師からの薬は使えませんが、1年生になると対象になります。1年生になった段階で、じっと座れないということだけではなく様々な特性が見られ学習に大きな影響が出るだろうというときには、薬の服用も方法の1つです。現在は3、4種類の薬があり、その日だけ効くもの、2～3週間で緩やかに効いてくるものなどがあります。どれも覚醒機能があり、注意集中機能を増していく薬です。その薬を飲むことでぐっと落ち着いて集中できることがあります。どの薬が効くかや副作用のことも考える必要があるため、小児科や児童精神科の医師に相談してください。

乳幼児期は薬を使えません。この時期にできることとして「ペアレントトレーニング」がお勧め

です。子どもへの上手な関わり方や子どもが自信をもって生活していくための環境を作るなど、親のためのプログラムです。

7. 自閉スペクトラム症

(1) 自閉スペクトラム症とは

「自閉症」「アスペルガー障害」「高機能自閉症」をまとめて「自閉スペクトラム症」と呼んでいます。昔は「広汎性発達障害」「アスペルガー障害」「高機能自閉症」という言葉がありましたが、今はそれら全てまとめて「自閉スペクトラム症」「自閉症スペクトラム障害」と言います。

アスペルガー障害と高機能自閉症の大きな違いは言葉の発達です。アスペルガー障害は言葉の発達が非常に進んでおり、高機能自閉症は様々な問題をもっています。アスペルガー障害は語彙力が豊富で、表現力が豊か、お喋りで、難しい言葉を3歳でも使うのを特徴としています。高機能自閉症はゆったりとぼつぼつとしゃべる、言葉数が少なく表現力があまり豊かではありません。そのため、親は言葉の発達の遅れと間違ってしまうケースが多いです。両方に共通しているのは、虫博士、恐竜博士などのようなオタクです。また、教えないのに文字や数字、アルファベットを覚えるところもほぼ共通して見られます。

(2) 自閉スペクトラム症の原因

自閉スペクトラム症の原因として様々にあるのですが、「自ら閉じ込める」と書くため、心の病と思われる方がいますが、全く違います。脳の中枢神経系の障害です。

(3) 自閉症の特徴

自閉症の特徴は4つあります。

1つ目は、対人関係の障害、社会性の特性とも言います。空気が読めない状態です。

2つ目は、言語・コミュニケーションの障害です。冗談が通じない、要は裏の意味が読めません。

3つ目は、想像力の障害と特異的な行動です。想像力の問題では、具体的なものは強いのですが、

目に見えないものについては弱いところです。特異的なところでは、こだわりの強さがあります。

4つ目は、感覚の障害です。大きな音や洗濯機・掃除機・トイレ・換気扇の音などが嫌な子どもがいます。光の感受性に敏感で、LEDや太陽の光が嫌な子どももいます。中には蛍光灯の光が1秒間に何回点滅しているか見えている子どもがいますと言われています。匂いに敏感、ある周波数に敏感というように様々な感覚系の問題を特性にもつ人が多いです。

（４）対人性社会性の障害

年少児くらいまでは周りの空気が読めない子どもはたくさんいます。けれども年長児くらいになると、今の場面がどういう場面であるか、こういうときには人はどのような気持ちをもつのかをだんだんと理解できるようになります。けれども自閉スペクトラム症の子どもにとっては、場面や人の感情の理解がなかなか難しいところがあります。顔にイボのある人を前にして「おかあさん、あの人鼻のところになんかついてるね」と聞いてみたり、赤信号で渡っている人を見ると「あの人渡ってる！」と大きな声で言ったりしてしまいます。普通なら大きな声で言うとその人に気付かれる、その人がどういう気持ちになるかを考えるので言わないものです。けれども、思ったことを全部口にし、相手を傷つけてしまうことから、トラブルがとて多くなってしまうのです。

共感性の弱さがあります。例えば、家族みんなが「いつ咲くかな」「どんな色かな」と母親が育てているチューリップの開花を楽しみにしていました。ある日咲いたチューリップを囲み、父親が「春がきたんだな」、姉が「私が思っていたとおり赤色ね」と大喜びしている隣で、Gくんは「それがどうしたん」と言います。母親が「みんな楽しみにしていたじゃないの。どうしてこの気持ちがわからないの？」と聞きますが、ここが共感性の弱さです。周りの空気が読めないことから人が傷つくことがたくさんあります。

人との距離の取り方が下手です。誰にでも親し

く接するのですが、マイナスに出てしまうことがあります。例えば、男の子が女の子の頬を「すべすべしているね」となでる。本人が嫌がってもしてしまう。「してはいけないよ」と言われてもなぜしてはいけないかが分からない。こういうことがそのままずっと残っていくと孤立が深まってしまいます。

（５）言語コミュニケーション障害

語用論の障害が中心です。裏の意味が分からないために、冗談、皮肉が分かりません。言葉のやりとりが困難で一方的です。相手の表情が読めません。

例えば母親が台所で用事をしていて「Hくん、お風呂見てきて」と言われ、Hくんはお風呂を見に行きます。Hくんは言葉どおりに解釈して、ただ風呂場を見て「見てきたで」と帰ってきます。母親はお風呂が沸いたか、あるいは水がいっぱいになったかなどを意図して言っているのですが、伝わりません。この意味のずれが出てくるのが語用論の問題です。

ある日、5歳のIくんから夜の11時に電話がかかってきました。おもむろに「USJ行ったか？」と尋ねてきます。おそらくUSJに行ったことを友達に話しても話にのってもらえず、友達だと思っている私のところに電話をかけてきたのでしょう。「ジェラシックパークでな、生息地が違う恐竜が同じところにいたんや。1つはモンゴルで、もう1つはアメリカのネバダ州なんや」と話します。子どもが使わないような言葉を使い、恐竜の話を一方的にするだけで、相手の話は全く聞かない。これでは同じ年の子どもとコミュニケーションはとれません。Iくんの話を聞いてくれるのは先生だけになってしまいます。このような状態が園の中で起きます。

ほかに、「ここにえをかこう」と言われて、画用紙に平仮名の「え」を書いたり、「もっと頭を使いなさい」と言われて、頭でドアを開けたりする子どももいます。

（６）心の理論課題に弱い

他人の視点に立つことが苦手、相手の気持ちの理解が難しい、言葉を字義通りに解釈するなど、心の理論課題に弱いところがあります。例えば、J、K、L、Mの４種類のお菓子の絵を見せ、どのお菓子が好きを尋ねます。Nくんは「J」と答えました。今度はその４種類のお菓子の絵の真ん中にKに目線を送る子どもの絵を加えて「この子はどのお菓子が好きだと思う？」と尋ねると、自閉スペクトラム症のNくんは「J」と答えます。理由を尋ねると「だって僕はJが好き。だからこの子もJが好きに決まってる」と答えます。同じ質問を定型発達の３～４歳の子どもにしてみると、ほとんどの子どもが「K」と答え、その理由を「だってこの子はこのお菓子を欲しそうに見ているから」と答えています。目の動きから察することが３～４歳の子どもができています。自閉スペクトラム症の子どもはアイコンタクトが弱いのがコミュニケーション上の大きな問題と言われています。正にこれがそれに当たります。

（７）言語面の特徴

幼児期に、発音がはっきりせず話し方は幼いのに、話している内容が年齢以上に大人びている。読む力はあるのに、理解力に問題がある。このように、こちらはいいけどこちらは問題というように出てきます。

（８）結果しか言わない

Oくんはいつも持ち歩いている恐竜図鑑に書かれていることは丸暗記しているくらいの恐竜博士です。ある日１人の先生が「恐竜はどうして絶滅したのか教えて」と尋ねると「分かりません」とけんもほろろです。また別の日に、違う先生が同じことを尋ねました。「分かりません」と答えましたが、ちょうどそのとき母親が同席しており「恐竜の絶滅にはいくつかの説があるっていつも言ってるじゃない、先生に教えてあげて」とフォローしたところ「３つあります」と答えます。「どんな説かな」と更に尋ねると「１つ目は隕石

が地球に落ちて大洪水が起きて恐竜が死にました。２つ目は氷河期で恐竜が死にました。３つ目は卵の殻が硬くて産まれにくくなりました。しかし今の学説ではどの説が正しいのか分からないので『分かりません』と答えるのです。結局分かっているのですが、間のプロセスを全部抜かしています。自分の知っていることは当然あなたも知っているだろうというところがあるようで、間のプロセスを伝えようとしません。母親がそのプロセスを尋ねることで、やっと相手に伝わっています。園の中でも自閉の傾向をもっている子どもが何か一言喋ったときには、その言葉の背後に何かないだろうかと思いを馳せ、また母親ともその辻褄を合わせておくことが大切です。こちら側からすると、「あなたが言ってくれないから分からない」ではありますが、本人にしてみると「あの先生、僕のこと分かってくれない」となります。このずれが大きいのが問題です。

（９）顔を見分けるのが苦手

顔を見分ける力が弱いところがあります。相貌失認といいます。自分の担任の先生がスーパーですれ違って「こんにちはPくん」と言っても、気が付きません。中には声を聞いたら分かるタイプもあります。

クラスの友達を自分が友達と決めた子どもとそうでない子どもとを極端に分けてしまうことがあります。

すごく頭がよく記憶力も抜群にある子どもでありながら、人間関係ではそんな問題を起こしたりします。

（10）こだわり

この道しか通らない、ご飯を食べるときや服を着るときの順序が決まっているなど、生活の中で決まりや儀式的行動を取り入れるところがあります。家に帰って電気をつけるのが自分の役割だと思っているのに母親がつけてしまうと大騒ぎしてしまい、もう一度外に出てドアを開けるところからやり直さなければ収まらないこともあり

ます。

(11) 予定変更が苦手

予定変更が苦手です。急に予定が変わってしまった場合、非常にごねる場合があります。突然ごねだします。先生からすると、なぜ急にごね始め、言うことを聞かなくなったのか分からないかもしれませんが、子どもにしてみれば「予定が違うやん」という思いです。発達障害、特にADHDと自閉傾向の子どもには、その日の予定を前もってしっかりと教えておくことが大切です。今日はどこで何をしますということを細かく丁寧に説明をします。そしてそのとおりにしなければ納得しません。例えば、外に出かける前に「自動販売機でジュースを買いません」ということをきちんと伝えておかなければ、自動販売機の前で「ジュース、ジュース」と大騒ぎする子どもがいます。そうすると母親が周りの目を気にして「今日だけよ」と買ってあげたりします。これをやってしまうとこれまでの躾がゼロになります。決めたことは守ってください。「今日は許してあげる」はダメです。昨日この点で叱ったら今日も叱らなければなりませんし、今日この時点で褒めたら明日も同じ時点では褒めなければなりません。このように決められたステップは必ず守ってください。

決まったパターン生活を好むのは、次の場面の予測がつくので気持ちが安定するためです。見通しがもてないと不安になり、混乱します。発達障害の子どもにとって、見通しがもてるかどうかはとても大きなポイントです。ADHDはこの「見通し」に当たる部分を「段取り」と言います。「これの次にこれをして、その次はこれをします」というのが段取りです。この段取りが弱くできないところがあります。ですから絵に描いて示していくわけですが、自閉スペクトラム症の場合も絵に描いて貼り、どれをしていくかを見せることが大切です。これが見通しです。混乱してパニックになったら、静かな場所で落ち着かせます。これが先に述べたクールダウンです。

例えば予定が変わったときには「ごめんなさい

ね。予定が変わって」と先に謝ります。子どもは今日のこの時間はこれをすると思っているのに、急に予定が変わると気分が悪くなってしまいます。ですからそこは先に謝りましょう。

小学校では、前もって予定表を提示し、プリントを配布して安心させます。言葉だけではなく絵や図を使って説明するのは園でもやります。

(12) 勝ち負けにこだわる子

勝ち負けへのこだわりがとても強いです。自分のチームが負けるとその責任を全て背負って泣く子どもがいます。友達が叱られていると、自分が叱られたごとく一緒に泣く子どももいます。

何事もそうですが、ルールを前もって決めておくことが大切です。例えば、トランプをするときには「負けても泣かないで最後までやるのであればゲームをするよ」と最初に約束します。約束は守れないだろうなと思っても、最初に約束します。そしてその内に1回でも、泣きそうになりながらもやり遂げたときには、いっぱい褒めましょう。本人が頑張ったとき、我慢できたとき、何とか最後までゴールしたときに上手に褒めることが大切です。これを通してどういうことをしたら褒められるかが本人の頭の中に入ります。

(13) タッチにはルールがある

幼児期から学童期で非常に注意しなければならないのは、タッチにはルールがあることを教えることです。ものすごく不安があるときに母親の胸を触ってべったりしていた子どもが、そのまま小学校に上がってしまうと、担任の先生が女性の場合、先生の胸を触ってしまうことがあります。そのときに先生が「やめなさい」と言うとびっくりにしてしまいます。母親はさせてくれるのに、どうしてダメなのかが分かりません。していいことと悪いこと、一般常識は全て園の終わりには徹底的に教えておくことがとても重要です。特に、社会常識で触っていい場所とダメな場所は常に教えていってください。

(14) スライド型とフラッシュバック現象

瞬間、瞬間を生きるスライド型です。

例えば、Qくんは園でトイレに行き、ポケットに入っているハンカチで手を拭き、その後ポケットに戻しました。ところがうまく入らず落ちてしまいました。Qくんは戻したつもりでいます。一部始終を見ていたRくんがハンカチを拾って「Qくーん」と差し出します。当然Qくんは自分が落としたハンカチを拾ってくれたRくんから受け取り「ありがとう」と言います。これが年長児のほとんどの姿でしょう。けれどもQくんは「泥棒、返せ!」とハンカチをひったくります。「手を拭いたハンカチをポケットに入れたけれど、ポケットから落ちた。Rくんは親切にハンカチを拾い、声をかけてくれた」という一連の流れを理解できないために、「Rくんがハンカチを持っている」ということから、「Rくんが盗んだ」ということになってしまいます。これをスライド型と言います。

こういう状態がよく起こると、「あの子トラブルメーカーなんですよ」と言いがちです。トラブルを起こすところを見ていると、意地悪をしているのではなくて、知らなくてしている場合があります。特に発達障害が絡む場合は、気付かないために誤解してそう思ってしまい起こしている事例が多々あります。そのような場合、喧嘩両成敗ではなくて、なぜそのケンカが起こったのかをしっかりと先生が聞き出す必要があります。ここがなければフラッシュバックが起きます。

例えばこの2人が数年後に同じ小学校にいたとします。Qくんが急にそのことを思い出し「お前、幼稚園のときに俺のハンカチとったやろ、泥棒」とRくんを突き飛ばすようなことを起こしたりします。これを映像的再現を伴う再体験「フラッシュバック現象」と言います。不快体験を積み重ねると、その不快な記憶とつながって、突然「Rくんからこんな嫌なことをされたんだ」と思い出してRくんを突き飛ばしたりします。このようなことが起こらないように、前の段階でしっかりと話を聞いて説明してあげることが大切です。「今

QくんはRくんに泥棒って言ったよね。だけど本当にRくんが泥棒だったらQくんのハンカチをポケットに入れて持って行ってしまうよ。でもRくんはQくんのハンカチを差し出して「Qくーん」と言ったでしょ。あれはRくんがQくんに返そうとしていたのよ。だからQくんは「ありがとう」ってRくんからハンカチを受け取ったら良かったんだよ」というところまで教えます。きめ細かく丁寧に冷静に怒らないで伝えていくことがとても大切です。

(15) 視覚的で分かりやすい指示

全ての情報は視覚的に分かりやすく提示してください。耳から入った情報はすぐに消えます。絵やカードや写真に撮って貼っていくのが良いと思います。そして2つのことが同時にできないので、1つずつ確認していくことが大事です。

(16) どのようにして身に付けるか

小学校では廊下を走らない校則が多いでしょう。走ると「廊下を走ってはいけません」と注意されます。そうするとほとんどの子どもはゆっくり歩きます。けれど自閉スペクトラム症を中心とした発達障害の子どもにはその意味が分かりません。否定的な意味の裏が読めないためです。「廊下を走ってはいけません」の真の意味は「廊下はゆっくり歩こうね」です。それが伝わっていません。そのため、そこから教えなければなりません。「『廊下は走りません』の答えは『廊下はゆっくり歩きます』だよ。それじゃ今から先生と『ゆっくり』をやってみるからね」とまずは先生がモデルを見せて、次は子どもの手をつないで子どもの歩幅でゆっくりと再現してみ、最後は子ども1人でゆっくり歩かせます。そしてその後に「『廊下を走ってはいけません』という言葉を開いたり見たりしたときは、今のゆっくり歩くを思い出してください。それが答えです」と言いましょう。これをソーシャルスキルと言います。

ソーシャルスキルというのは、具体的にやって見せて、させてみて、確認するの流ればなければ

身に付きません。耳で「これをしなさい」「こうするのよ」と言っても頭に入らない子どもがいます。これが発達障害なのです。発達障害の子どもには、丁寧に、きめ細やかに、子どもに寄り添うことを大切に関わって欲しいと思います。

令和2年度第10回共同機構研修会

令和3年1月20日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館